

スペイン地中海島嶼の伝統的農村における最近の変化

——イビサ島サン・マテオ教区を事例として——

栗原尚子

はじめに

近年のスペイン地中海地域で、最も注目すべき現象は、観光業の急速な発達とそれに伴う観光地域の開発である。バレアレス諸島の一島嶼イビサ島もその例外ではない。イビサ島における観光業の発達は、他の地域におけるのと同様に、スペインが国際社会に復帰した一九五〇年代の初めに始まる。しかし、イビサ島の経済にとって観光業が決定的に重要性を持つに到るのは、一九六〇年代にはいつてからであり、西ヨーロッパ社会におけるマス・ツーリズムの著しい需要の増加という要因をその背景としている。⁽¹⁾ マス・ツーリズムの増加が観光業の急速な成

長を誘発し、従来の観光開発にさらに拍車をかけたといえる。

これまでに、このようなイビサ島における観光業の発達過程を分析の対象とした研究は、すでに若干発表されている。⁽²⁾ それらの研究における観光業の発達によって惹き起された影響に関する分析は、観光開発を積極的に推進している地域を対象としている場合が多い。そのような地域では、観光業の発達による雇用の機会の増大に伴うアンダルシア地方をはじめとするイビサ島以外の地方からの著しい人口流入、その結果としての急速な人口増加、さらに観光業を中心とした就業構造や土地利用の変化、乱開発による農地の蚕食などを、主要な影響として

指摘できよう。

しかしながら、観光業の発達もたらす影響の現われ方は、具体的にはそれぞれの地域によって異なっていることは言うまでもない。筆者は、観光開発に未だ組み込まれていない純農村においてこそ、むしろ、イビサ島で現在進行している観光開発の本質、観光開発の波及効果と地域開発の問題等が明瞭に把握できるのではないかと考える。したがって、本稿では、このような視点から、イビサ島の中でも最も後進的な農村であるサン・アントニのサン・マテオ教区を調査の対象地域としてとりあげた。本稿の目的は、サン・マテオ教区の伝統的な農村の後進性の実態と観光業の発達によってもたらされた影響による最近の諸変化とを分析し、いくらかの問題点を整理することである。このため、本稿の構成は、第一節で、生活空間としての教区の重要性と居住形態の特徴を、第二節で、土地所有と土地利用を中心に伝統的な農業形態を、第三節で、最近の変化として人口構造の変化を中心に人口流出の過程を説明することからなっている。

なお、サン・マテオ教区の調査は、一九七七年十月から十二月まで約二カ月にわたって実施されたイビサ島の

実態調査の一部である。

第一節 サン・マテオにおける

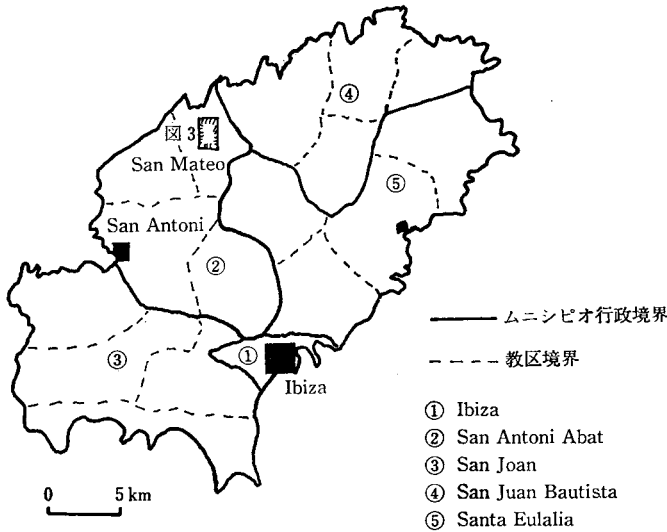
生活空間と居住形態

イビサ市から国道を北に向かってバスで約四〇分、終点のサン・マテオの教会に到着する。教会の周辺には、数軒の農家と一軒の居酒屋以外には何もない。イビサ市にぬける南を除いて三方を山に囲まれ、国道沿いの平坦地とアウバルカ Anbarca とよばれるポリエに広がる耕地が、この地域の主要な生産基盤である農業の中心的な活動の場である。山麓に点在する農家の白い壁と緑の山地の対象が美しい農村である。

(一) 日常的な生活空間

サン・マテオ教区は、行政的にはサン・アントニのムニシピオに属している。イビサ島におけるムニシピオの行政領域が最終的に決定されたのは、一八三三年で、教区の領域はそれ以前の一七八五年に教区が創設された際に定められている(図1参照³⁾)。ムニシピオの行政領域の実質的基盤が問題にされるとき、しばしば言及されるのは、一二三五年のレコンキスタ後の封土として分割さ

図1 イビサ島の行政領域と教区領域



れた Pla de Vila の四つの quarto (quarton) との関係である⁽⁴⁾。サン・アントニのムニシピオは、全域が Portmany に属するサン・アントニ教区、多くは Portmany である

が、一部分 Pla de Vila と Balansat に属するサン・ラファエル教区、大部分 Balansat に属するサンタ・イネス教区とサン・マテオ教区から構成されており、従来指摘されてきたように単純に Portmany の quarto に対応するものではないことが明らかである。サンタ・イネスとサン・マテオの両教区は、一七八五年以前は、同じ Balansat の quarto に含まれる隣接のサン・ミゲルの教会に属し、歴史的にも両地域の関係が強かったことを考慮するならば、ムニシピオの行政領域は、各ムニシピオが四つの教区領域を包含するように、かなり人為的に境界を決定したといえよう。

現在でも、ムニシピオの中心であるサン・アントニの町に行くには、まずイビサ市を經由しなければならぬ。片道一時間以上を要する。したがって日常的な買物をはじめとして経済的には、サン・ミゲルやイビサ市とのつながりの方が大きい。

このサン・マテオ教区だけでなく、イビサ島ではムニシピオに対する帰属意識は弱い。イビサ人としてのイビセンロ ibicenco、イビセンカ ibicenca と「島への帰属意識の強さは、対マヨルカあるいはメノルカに対抗し

てしばしば示されるが、その次には、出身の教区が自己の地域への帰属をアイデンティファイする単位である。日常的レベルでの生活空間が教区を単位としていることの一例であり、また教会を中心とした生活、すなわちカトリック教が生活上重要な役割を果たしてきたことの反映でもある。後に述べるように、分散居住が卓越しているイビサ島の農村で、教会で行われる様々の儀式や守護聖人の祭礼が、農民を社会的に結びつける唯一の要因であった。

現在、サン・マテオの教区は、*「セラに、Cea's Turis, Aubarca, Sa Noguera, Miguel Cires, Benimaino, Es Raco, Besara の七つのヴァンダ verde⁽⁵⁾ に分割される(図5参照)*。このヴァンダの領域が生活の最も基礎的な単位といえるが、実質的には、宗教的・行政的な必要性からの管理・統治の単位として機能してきた側面がむしろ強い。サン・マテオでは教区、ヴァンダを共同体的村落を構成する基礎的単位と考えるような、共同放牧地などの物質的基礎は存在していない。共同放牧地として重要な山林は初めからすべて個人所有に分割されており、共同の農作業を行うような組織も歴史的に存在していない。

い。したがって教区・ヴァンダは生活の基礎的単位といっても経済的な実質的基盤をもっているのではなく、宗教を通じての社会的な基礎組織の空間単位という性格が強い。またサン・マテオの教会は、一九世紀半ばの教会所領地の解放 *desamortización* の対象となるような所領地を所有していなかった。イビサ島の農村の村落の性格を示す重要な特徴である。

(二) 居住形態

イビサ島の居住形態で、マヨルカ、メノルカの他の島嶼と比較してひじょうに特徴的なのは、分散居住の卓越である。一八四五年、イビサ島を調査したバレアレス県知事は、イビサ市とサン・アントニの小漁港の付近以外には集住地域がないと書き残している。⁽⁶⁾ *Vila Valenti* は、歴史的にイビサという一都市が、宗教的・経済的勢力によって全島の農村を支配していた状態は、他の地中海島嶼にはその例がないと指摘している。⁽⁷⁾

一九七〇年に、各ムニシピオにおける人口の分散率は、イビサ市一五・五%、サン・アントニ五三・九%、サン・ジョセフ八八・九%、サン・ジョアン・バプティスタ九六・九%、サンタ・エウラリア八二・一%となり、

現在もなおイビサ市以外での分散的人口分布すなわち分散的居住の卓越性を証明している。⁽⁸⁾このような分散的居住を形成した原因については、水の確保のため、疫病の対策上あるいは均分相続による耕地の細分化などの要因が列挙されうるが、それらがどのような関連のもとで現在のような状態を生みだしたかを跡づける歴史的资料に欠けている。現在の段階では十分に解明されていない点である。

サン・マテオでも図4に明らかのように、居住地は分散している。ここでの植民の史的過程を示す資料は存在しないが、分散的居住の起源は、非常に古い。現在のような居住地の展開は一九世紀以降と考えられる。一八〇六年でさえもアウバルカ湾からのベルベル族による攻撃があったことが伝えるように、⁽⁹⁾レコンキスタ以降も、度々、外敵の脅威にさらされたこと、さらにペスト、飢餓の危険と背中あわせにあった時代には、人口増加も停滞していたこと等がその背景にある。事実、サン・マテオでは、一七八六年七一三人、一八〇六年七九一人、一八二六年八一二人、一八四六年九四七人、一八六六年九八六人と、一八世紀後半以降着実に人口が増加している

(図5参照)⁽¹⁰⁾

サン・マテオの居住の展開でもうひとつ注目すべきことは、アウバルカのポリエに居住地が存在しないことである。アウバルカの開拓は、排水あるいは硬い土質等の農業技術上の問題から一九世紀後半以降とされ、開拓の起源はむしろ新しい。⁽¹¹⁾アウバルカの開拓に伴い、従来の山麓地から居住地が移転しなかったのは、肥沃な耕地を最大限利用するためと説明されているが、⁽¹²⁾マラリヤ等の疫病の対策上、地表水の確保、燃料確保や家畜の放牧のためにもっていた山地の経済的価値など農業の生産活動との関連でとらえる視点が必要であろう。

サン・マテオだけでなく、イビサ島の農村で興味深いもうひとつの現象は、各農家の屋号である。Can, Cas, Cana (カスティリヤ語の Casa en, Casa el, Casa la に相当)のあとに、地名、植物、動物、地形、職業など様々の名称をつけて表わされている。サン・マテオでは、この屋号の数は、一七八六年には一一八、一八七六年には一六八、一九五〇年には一八八で一九五〇年まで徐々に増加している。一つの屋号のもとに、二―三世代の家族あるいは世帯主の兄弟夫婦などが居住しており、したが

って核家族を単位とした世帯数は、この屋号の数よりも多い。ここでは、一つの屋号のもとに統合されている家族が実質的な意味をもっているといえる。このような屋号の歴史的起源は、姓名の類似性と関係している。かつて人口が少ない時代には、個人名のあとに居住地名を付加すれば、各個人を区別するのに充分であった。しかし人口の増加とともに、このような方法が機能しなくなり、屋号の必要性が生じたのである。⁽¹³⁾ 例えば、一九五〇年の住民台帳によって、サン・マテオの住民の名前をみると、男性の洗礼名は、アントニオ、バルトロメ、フランシスコ、ホセ、ジュアン、マリアーノ、ミゲル、ピセンテがその他の四人を除いてすべてであり、女性の方は、アントニア、カタリナ、エウラリア、フランシスカ、イサベル、ジョセファ、マリア、マルガリータで語り尽せる。他方、家族名は、ボネット、ブフィ、コスタ、ブラネラス、ブラッツ、ラモン、リエラ、ロイグ、セラ、トレス、ツルが圧倒的に多く、父方の家族名でみる限り、トレス四四、ツル二七、コスタ二五、リエラ一五、ボネット一四、セラ一二、ロイグ一一となり全体の約八割に達している。⁽¹⁴⁾ したがって個人のフルネームは前記の洗礼

名と家族名の組み合わせになり、屋号による区別の必要性が意味をもってくるわけである。

節二節 サン・マテオにおける農業生産と後進性

本節では、とくに土地利用の実態を明らかにすることを通じて、サン・マテオの農業生産の形態とその後進性を中心に分析することにする。それに先立ち、土地所有の状況について若干整理をしておきたい。なお、分析はアウバルカのポリエを事例としている。

(一) 土地所有

アウバルカの耕地の土地所有状況をみるために、バレス県の財務省 Ministerio de Hacienda で管轄している土地台帳 Catastro rustico と地籍図を利用した。土地台帳は、各地区 poligono 別に、各地片 parcela との保有者名、面積、土地利用の種目、生産額、課税額を記載している。利用にあたって問題となるのは、保有者名が必ずしも所有者を指しているわけではないことである。⁽¹⁵⁾ しかし、サン・マテオではすべて自作農であるということから、この点に関する困難は除去される。

しかしながら、一農家の農地所有規模を知るためには、各地区をこえて所有する場合あるいはとくにムニシピオをこえて所有するような場合は、各地片ごとにまとめられた土地台帳では大きな困難が伴う。さらに、サン・マテオのように類似の氏名が多いところではとくにその困難は大きい。これに代る方法としての聞きとり調査が考えられるが、自己の所有する面積を正確に把握している例は少ない。

したがって、サン・アントニのムニシピオレベルでの土地所有状況をみることにより所期の目的にかえる。一九七二年の農業センサスの結果が一部公刊されており、バレアレス県については、土地規模別農業経営体数、農業従事者の年齢階層別人口数、土地の所有類型別面積、地片規模別数を知ることができる。⁽¹⁶⁾ サン・アントニでは、農業経営体数八一四のうち、五ha未満が全体の三〇・〇%、五ha以上一〇ha未満が二二・二%、一〇ha以上二〇ha未満が二七・四%、二〇ha以上三〇ha未満が一・三%、三〇ha以上が九・一%で、二〇ha未満が全体の約八割を占めている。総耕地面積一〇九〇五haのうち約九割は自作地であり、小土地所有による自作農が卓越してい

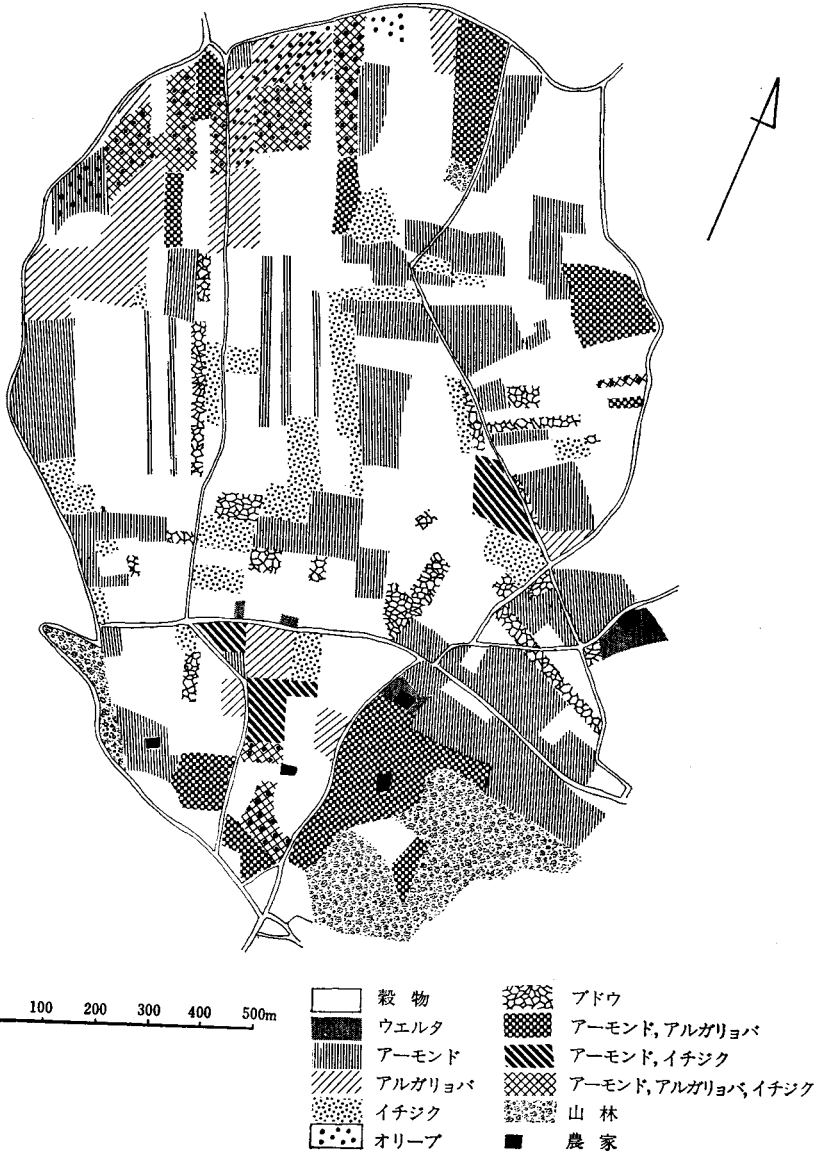
るといえる。このような土地所有形態は、イビサ島全体の一般的傾向である。大土地所有が現在でも卓越しているメノルカ島や、大土地所有は解体したが、その解体の過程でバルマの都市住民によってかなりの農地の集積が進んだマヨルカ島の場合と比較すると、小土地所有の卓越はイビサ島の特徴となっている。⁽¹⁷⁾ 農地を集積するような階層が発生しなかったのは、イビサ島における農業のみならず経済全体の後進性を反映しているともいえる。

(二) 土地利用

土地台帳に各地片ごとの土地利用種目とその面積が記載されていることは先に述べた。が、実際に観察される土地利用の実態とはかなり異なっている。まず樹木栽培と穀作は混在しており、樹木の間隙で穀作が行われている。また栽培樹木の種目も異なっている例が多い。土地台帳ではイチジクの栽培面積が多く記載されているが、実際はそうではない。図2は、アウバルカの実際に観察される土地利用を图示したものである。また図3は各地片を示す地籍図を图示したものである。各地片を規模別にみると、一ha未満が全体の六割を占め、かつ九割以上が五ha未満の階層にあり、耕地の細分化の実態を現わし

図2 土地利用図

—アウバルカ、サン・マテオ教区(イビサ島)— (1977年11月 栗原原図)



(73) スペイン地中海島嶼の伝統的農村における最近の変化

図3 土地地籍図

—アウバルカ, サン・マテオ教区(イビサ島)—



0 100 200 300 400 500m

(注) Delegación Provincial de Ministerio de Haciendaの地籍図より作成。農家の土地所有状況を示す例としてA. B. Cの農家が所有する分割地を图示した。アウバルカの南部は居住地の周辺に農地をまとめて所有しているが、北部は、周辺の山地に居住地、アウバルカ中心地に耕地を所有している傾向がある。またいずれもここでは農家は、小分割地化された山地と耕地とを所有している。……は実際に観察される地片、すなわち土石をつみあげられた段状の耕地片を示している。

ている。なお、地籍図に表現されている各地片は、実際に観察される形態と必ずしも一致していない点を注意すべきである。アウバルカは、比高一八〇—一九〇メートル、長径二キロメートル、面積約二平方キロの窪地（地形的にはポリエ）であるため、各地片は、周辺部に向かって比高を増すごとに階段状に土石をつみあげて囲い込まれている。周辺部では、地籍図の一地片よりもさらに細く段状に区画されて利用されている。

図2に明らかかなように、ここでの主要な土地利用形態は、穀物、アーモンド、アルガリョバ、イチジク、オリブの組み合わせとブドウ栽培であり、ウエルタ Huerta（灌漑地）は居住地の周辺にわずかにみられる。アーモンド、アルガリョバ、オリブを混植した耕地はむしろ荒しづくりで、中央部のアーモンド、アルガリョバのみあるいは両樹木を混植した耕地が、樹木の手入れもゆきとどき経済的価値が高い。穀物栽培は、小麦—大麦—春播きソラマメ haba、エジプト豆 garbanzo—休閑の順で輪作される。穀作、イチジク（飼料）、オリブは自家消費用であり、したがって商品作物として重要なのは、アルガリョバとアーモンドである。

バレアレス諸島、とくにマヨルカ島とイビサ島の農業の発展にとって重要な契機となったアルガリョバ、アーモンドの導入は一八世紀後半である。それ以前は、穀物、ブドウ、オリブ栽培を中心とした自給自足経済を基礎としていた。マヨルカ島で、新しい商品作物の導入に大きな役割を果たしたのは、一八世紀のイギリス占領下のメノルカ島で試みられた経済発展の諸政策を模倣した「国の友同志会 La Sociedad de Amigos del Pais」による一連の改革への努力である。⁽¹⁹⁾ アルガリョバはかつてのオリブの栽培地に、アーモンドは西部の新開地に拡大し、小農の現金収入の重要な部分を構成してきた。⁽²⁰⁾ イビサ島では、マヨルカ島におけるような「国の友同志会」の役割を果たしたのは、M. Cayetano Solar を主導者とする「経済団体 La Sociedad Economica」である。⁽²¹⁾ サン・マテオに、アルガリョバ、アーモンドが導入されたのはいつであるかは不明である。Urech Cife の一八六〇年のセンサスによると、サン・アントニのムニシピオで栽培樹木の面積が最も大きいのはイチジクで、次いでオリブ、アルガリョバ、アーモンドとなっている。⁽²²⁾ しかし一九六二年の農業センサスでは、その順位は、アルガリョ

バ、アーモンド、イチジク、オリーブとなり、イチジクとオリーブがこの約一世紀の間に三〇〇haから四〇〇—五〇〇haへとわずかに栽培面積を増加させたのに対し、アルガリョバは二八一haから一七四二haへ、アーモンドは一三二haから一四二五haへと顕著な増加を示している。したがって、一八世紀後半に、新しい作物の導入が努力されたが、それが確実に拡大したのは一九世紀後半以降と考えられる。このことは、一九世紀半ばすぎ、バレアレス諸島を隅なく探索し、当時の農村の実態を今に伝える貴重な資料であるルイス・サルバドールの旅行記によっても裏づけられる。サルバドールは、サン・マテオについて、教会に近接してかたまったわずかの農家がみられるにすぎないこと、周辺は、大きな石灰岩の岩石がごろごろしており、付近の丘陵も同様な状態にあること、畑には、イチジクとオリーブの樹木が卓越していること等を書き残している。⁽²³⁾

現在のアウバルカにおいても、オリーブは山地あるいはアウバルカ周辺の山麓に栽培され、地味の肥沃な中心部では、アルガリョバ、アーモンドが重要な栽培作物であることについては先にも述べた通りである。このこと

は、前節の居住形態の展開のところでふれたアウバルカの中心部への開拓の過程と関連している。すなわち、以前には、アウバルカの周辺部の傾斜地を利用して栽培されていたブドウ、オリーブが主要な作物であったが、一九世紀後半以降、アウバルカの中心部への開拓は、アーモンド、アルガリョバの植樹という過程で進行的なことを反映しているからである。両樹木の拡大が、この地域の農家の経済的向上に多いに貢献したであろうことは想像にかたくない。

地中海地域の農業の発展にとって農業用水の有無が鍵であることは言うまでもない。サン・マテオでは、井戸を掘削しても水がでないと言われる。農業用水としては、地表水を集めたアルヒーベ *aljibe* といわれる溜池が、家畜の飲料水としてまたは夏期における蔬菜栽培のために利用されている。人間の飲料水は、各農家が家の中にもっているシステルナ *cisterna* という天水を集めた井戸によって確保されている。近年、隣りのサン・ミゲルからパイプを敷設して水を購入する組合が組織され、居住地の付近にウェルタをつくったが、このような組合は、アウバルカの南東部のサン・ミゲルに近い七戸の農家に

表1 農業カレンダー (サン・マテオ教区)

9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8月
耕起、 休閑地準備		春播耕 地の耕起	休閑地 耕起	除草	除草			休閑地 準備	脱穀		耕起
播種 (大麦, カラス麦 ソラマメ, エンドウ)		播種 (小麦)		除草				收穫			
收穫 (ブドウ)	移植	肥料		接木・剪定	耕起	消毒	消毒	消毒			
收穫・剪定 (イチジク)		耕起					接木				
	剪定・接木	播種	耕起				接木				收穫
	(アルガリ全バ)										
		耕起	播種	移植		接木					收穫
		(アーモンド)									

よってのみ構成されており、そのようなウェルタでは、自家消費のための蔬菜が夏期に栽培されるにすぎない。イビサ島における近年の農業の大きな変化は、耕地の灌漑地の拡大である。電動ポンプだけでなくスプリングラを利用している農家が増加している。このようなウェルタの拡大によって、輸出用の促成ジャガイモの栽培、アーティチョークなどの特殊野菜の栽培あるいは牧草栽培による乳牛飼育が進展している。観光業の発達の結果としての都市的近郊農業の展開といえよう。しかし、サン・マテオは、「水」の問題に制約されて、このような近年の農業の発展からはとり残され、自給度を最大限に高めるような伝統的な農業経営の維持に留まっている。サン・マテオにおける農業生産形態の後進性は、農業用水の不足によって一部形成されているといえよう。

次に農業の生産活動の実態を述べてみよう。表1は、この地域の農業カレンダーを示したものである。雨期が始まる十月末から十一月初旬にかけて耕地が耕起され、穀物播種の準備を開始する。耕起には、組合所有のトラクターが利用され、請負耕作も行われる。穀物の收穫は五月で、年間で最高の農繁期である。アルガリヨバヤア

イモンド栽培には剪定をはじめ手入れが重要であるが、サン・マテオではほとんどなされず、そのため生産性は低い。収穫は八・九月で、五月に次いで農繁期となる。上層農家の一例であるが、約三〇haの耕地に、穀物、アイモンド二〇〇本、アルガリョバ一〇〇本が栽培されている場合、収穫時に、小麦一五―二〇人、アイモンド一五人、アルガリョバ一〇人の延臨時雇用労働力が必要とされる。

最後に、サン・マテオにおける一般的な農家の農業経営を素描すると以下のようになる。所有する農地は相続による。相続はカタルーニャ地方の慣習法である均分相続が一般的で、長子が農地の半分を相続する権利をもつと同時に、両親の扶養義務を負う。現在は多くの場合、相続によって実際に農地が分割されることは少なく、分割による耕地の細分化、その結果としての農業経営の解体をむしろさける傾向にある。農地は山地と耕地から成り、山地はかつて放牧地としてあるいは燃料や農業資材を供給するものとして意味を持っていたが、現在ではほとんど経済的価値がない。オリーブは山地に多くの場合植えられている。耕地には、アイモンド、アルガリョバ

が植樹され、両樹木の下が穀物栽培に利用される。アイモンド、アルガリョバの商品作物の栽培以外は、すべて自家消費用のための生産である。自家製のパン、貯蔵された蔬菜、ブドウ酒、オリーブ、必要に応じて屠殺されるウサギ、山羊等自給率を高める努力が最大限なされる。近年、肥料やトラクターの利用等によって現金支出の割合が高くなり、臨時の農業労働者として稼ぐ現金収入あるいは観光関連産業に従事する家族構成員の収入が重要になっている。

第三節 サン・マテオにおける一九五〇年

以降の変化

本節では、一九五〇年以降のサン・マテオについて、一九五〇、六〇、七五年の住民台帳⁽²⁴⁾を利用して急速に進行している変化、なかでも人口減少の過程を中心に分析することにする。

(一) 就業構造の変化

職業構成の顕著な変化は、一九六〇年以降の観光関連産業従事者人口数の増加と、農業従事者人口の急速な減少である。まず後者についてみるならば、一九五〇年に

は、①基幹的農業従事者 agricultor 二四四人、②家事労働従業者 Labrador 二七二人、③牧夫一〇人であったのが、一九六〇年には、①と②が区別なく三〇七人、③が二人、一九七五年には①が六二人、②が一二五人となっている。この二五年間の基幹的農業労働力の四分の一への減少と牧夫の消滅は注目すべきことであるが、後の人口構成の項で詳述するように、男子の基幹的農業従事者の高齢化も見のがせない。四〇歳代および五〇歳代が全体の五八%を占め、四〇歳以上となると七三%に達する。

観光関連産業従事者は、三〇歳代以下の男子で一九六〇年に比較すると、七五年には、数の増加と内容の多様化が進んでいる。一九七五年の住民台帳に不在と記されている男子七名は、いずれも観光関連産業に従事し、シーズン中はイビサ市等に居住する。しかし、ホテルやレストランの従業員やタクシー運転手などの観光業に関連する職業は、それ自体としては決して安定したものではない。五月から十月までの観光シーズンに限られたものであり、残りの半年は失業ということになる。イビサ島の観光業の発達は、関連産業の発達と雇用の機会の増大をもたらし、島外からも人口を吸収している。バレアレ

ス県は、マドリッド、バルセロナ、ビルバオ大都市圏と同様に、スペインにおける人口流入地域であり、国内人口移動の流れの核となっている。が、観光業を成立せしめるメカニズムが、観光業を需要する地域(西ヨーロッパの先進工業諸国)との経済格差を基盤としている以上、観光関連産業の雇用労働は、低賃金と観光シーズン期間中の過重な労働が前提となっている。観光業の発達は、イビサ島で雇用の機会が限定されていた時期には、島外に流出していた人口を島内に定着させる契機とはなるが、以上のような問題を内包させていることには変わりはない。最後に付言すれば、サン・マテオでは、観光関連産業への従事は、女子の場合は、イビサ市のプティック等のヒッピーファッションの縫製下請けで、男子におけるようなサン・マテオを離れるような職業に従事することは社会的に受け入れられていない。

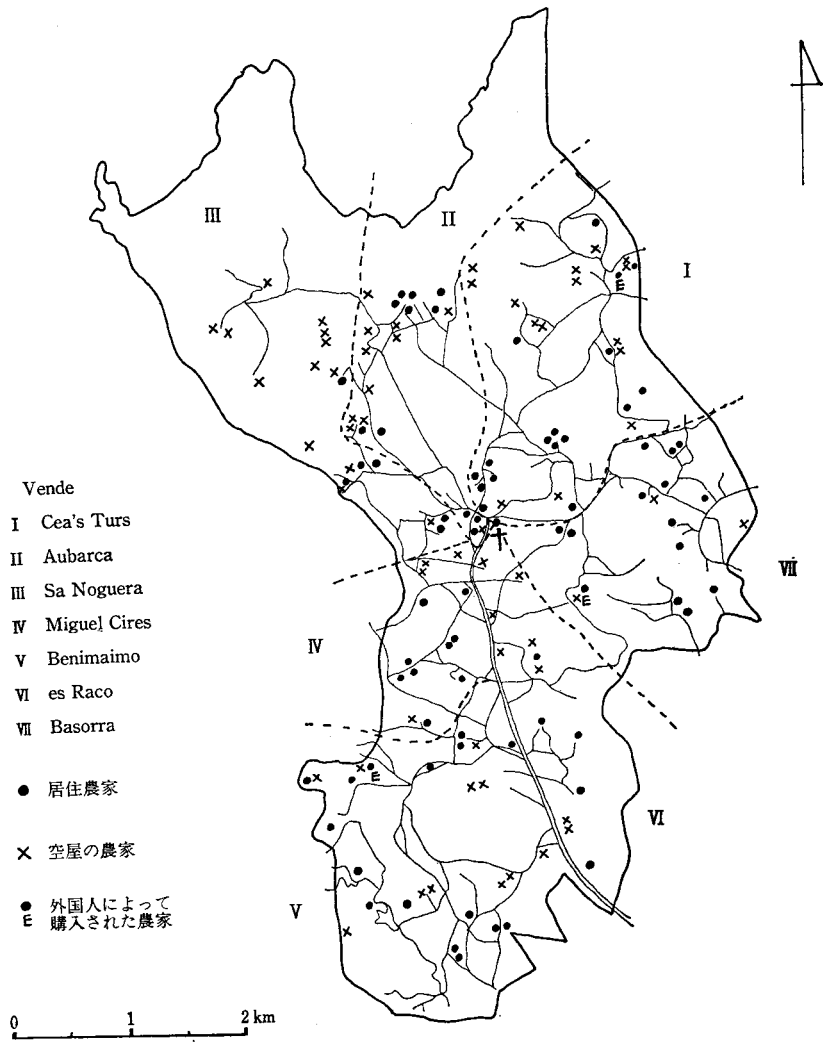
(二)人口構造の変化

就業形態の変化以上に、サン・マテオにおける注目すべき変化は、一九五〇年以降の急速な人口減少である。

図5が明確に表現しているように、一八世紀後半以降徐々に増加していた総人口および戸数は、一九五〇年か

(79) スペイ地中海島嶼の伝統的農村における最近の変化

図4 サン・マテオ教区(イビサ島)におけるヴァンダと農民の居住状況図(1977年11月 栗原原図)



ら七五年までのわずかに二五年間で半数にまで低下している。このような急速な人口減少は、どのような過程を経て進行したのであるうか。

一九五〇年から七五年にかけての世帯数と家族数(一つの屋号のもとに統合された複合家族。したがって屋号の数と一致)の変化をみると、前者が二三六から一五七へ、後者が一六一から九七へとそれぞれ減少している。各世帯を構成人数別にみると、二―五人および六―一〇人の階層の割合の大幅な減少と一〇人以上の世帯の消滅の反面、一人世帯の著しい増加が特徴的であらわれている。しかも一九七五年には、二―五人の階層九九のうち二人のみ(老夫婦)というのが四九世帯に達する。他方、一九五〇年と七五年の人口構成を年齢階層別に比較すると、二〇歳以下の年齢が四一・五%から二七・九%への減少、六〇歳以上の二二・六%から二六・二%への増加が明らかで、人口構成の老齢化が進行している。

以上のようなこの二五年間に現われた世帯数および複合家族数の減少、世帯構成人数の減少に伴う小家族の増加、人口構成の老齢化という特徴は、この地域の急速な人口減少が、家族総ぐるみの流出と、若い世代の流出の

二要因が相互関連の下に進行したことを示している。

このような農村からの急速な人口減少は、第一節で述べたようなイビサ島における特徴的な分散的な人口分布にも変化を与えている。すなわち中心的な観光開発地域への人口集中である。その代表例であるサン・アントニのムニシピオでは、一九五〇年から、一九七〇年までに分散率を七九・六%から五三・七%へ低下させ、中心的な観光地であるサン・アントニの町への人口集中を現わしている。サン・マテオから流出した人口の流出先は、イビサ市とサン・アントニの町が大部分である。

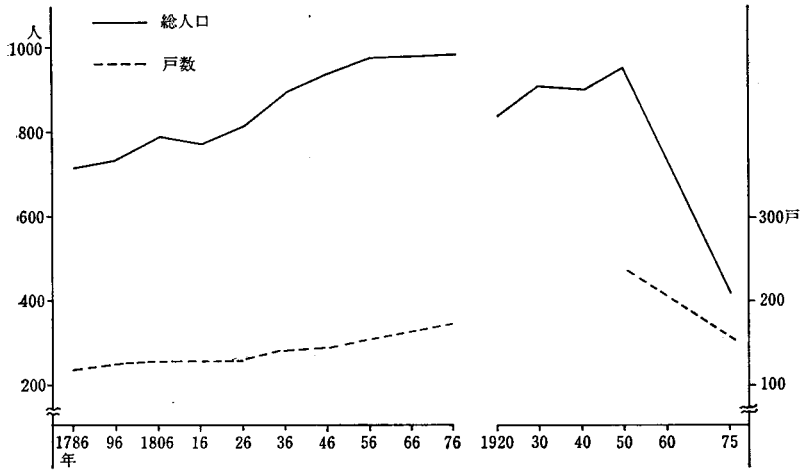
図4は、この二五年間に空屋となった農家を图示したものである。サ・ノゲラのヴァンダのような山地の交通の不便な地域の空屋の率が比較的高い。一九五〇年から六〇年にかけて空屋となったのは二四・六〇年から七五年にかけてが六七・六〇年以降とくに顕著にこの現象が進行したことを物語っている。

最後に、サン・マテオの人口構成の特徴をいくつか指摘しておきたい。それらはまた、サン・マテオの実態を総合的に表現しているともいえる。

第一に、人口の老齢化現象については先にふれたが、

(81) スペイン地中海島嶼の伝統的農村における最近の変化

図5-1 サン・マテオ教区の人口推移 (1786—1975)



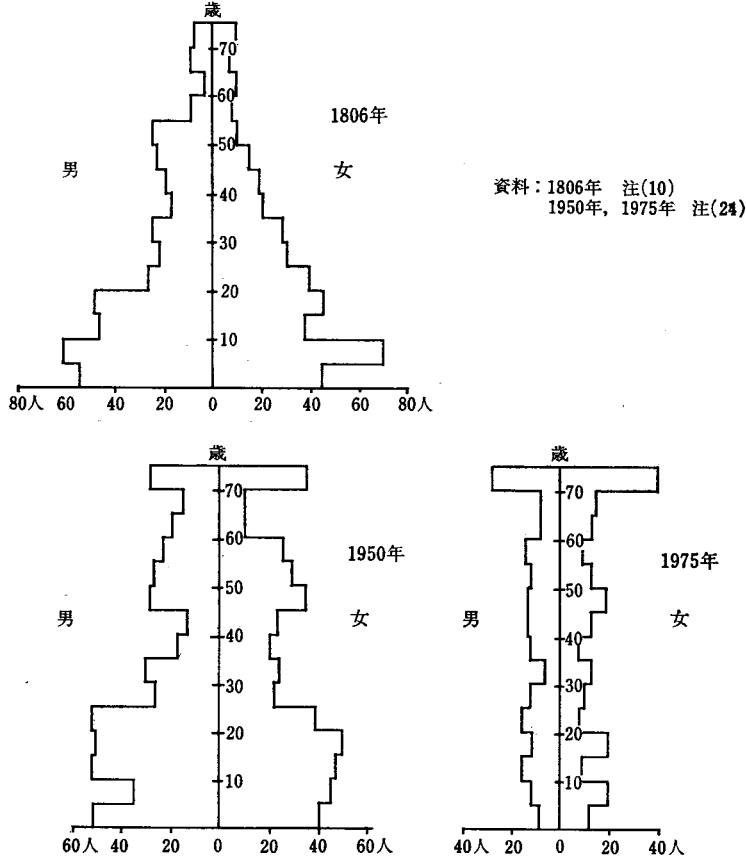
資料：1786—1876 注(10) } より作成
 1920—40 注(11)
 1950—75 注(25)

より詳細に年齢構成の変化をみると、最も減少率の高いのは、五歳未満の階層である。一二・七%から六・〇%へ減少している。他方、増加率の高いのは七〇歳以上の階層で、六・七%から一六・二%へ上昇している。図5に明らかのように、人口ピラミッドは一九七五年には、この地域における人口の再生産がもはや不可能であることを示している。

第二に、一九五〇年には、男子八七人、女子三四人、一九六〇年には、男子一二二人、女子二人、一九七五年には、男子七人が、住民台帳に不在と記されている。一九六〇年の住民台帳には流出先が記載されているので、それを参照すると、流出先は、リマ・イビサ(四人)、プエノス・アイレス、サン・パウロ、マヨルカ(三人)、アスンシオン、サンタ・エウラリアで、イビサ、マヨルカ、サンタ・エウラリア以外はいずれもラテン・アメリカの都市になっている。しかも、ラテン・アメリカへの都市へ流出している人口は、一九六〇年現在高年齢層であり、この地域の伝統的な人口流出の一形態としてのラミへの移住を裏付けている。

第三に、夫婦、夫あるいは妻のいずれかが死亡、独身

図5-2 サン・マテオ教区年齢階層別人口ピラミッド



という婚姻制度上の地位別にみると、男子は三〇―三四歳の間で、女子は二五―二九歳の間で、独身者が同年齢階層中に占める割合を著しく減少している。この傾向は一九五〇年から七五年まで変化していない。これらの年齢階層が、結婚年齢階層であるといえる。特徴的なのは、四〇歳をこえた独身者の割合が、一九五〇年には、男子一一・九%、女子一九・四%、七五年には、男子七・三%、女子一九・〇%と、男子の場合わずかに減少しているとはいえ、高い比率をもっていることである。このような独身率の高さは(特に男子の)、西ヨーロッパ諸国と比較した場合、スペイン

の前近代的な人口構造の一特徴であり、宗教という要因を介在させた人口を一定に維持するメカニズムの形成要因としてしばしば言及されている。⁽²⁵⁾ サン・マテオにおいても、このような現象が観察されるのは、土地資源の不足、他方で労働力の確保という点の反映として、伝統的な農村の実態を示すものとして興味深い点である。

(三) その他の変化

最近の変化を象徴する出来事は、前述の空屋になった農家の外国人による取得である。⁽²⁶⁾ 調査時までには、イタリア人、ドイツ人、アメリカ人が農家を購入し、改築して別荘として利用している。外国人以外では、バルセロナのカタルーニャ人の同様の例がある。その他、ヒッピー⁽²⁷⁾ による借家もあり、ホテル等の建設による大規模な観光開発とは異なった観光化が進行し始めたといえよう。観光地化の直接的波がここまで押し寄せてきたということであろう。このような変化を、サン・マテオに残り、従来からの生活を維持している住民は、好ましいものとしては歓迎していない。

スペイン全体では、このようなセカンドハウスが一九六〇年に約三〇万戸あり、他方で恒常的に現われている

労働者階層の住宅不足との関連で問題とされる点でもある。⁽²⁸⁾ さらに、地中海地域の観光開発が、直接的あるいは間接的に外国資本による土地の囲い込みを意味していることを考慮に入れるならば、観光開発、観光業の発達に示される観光地域の空間利用の背後に隠れた本質の一端が明らかとなる。

サン・マテオにおける人口減少の結果として蒙った変化には、児童数の減少による小学校の閉鎖（四校から二校へ）やサン・マテオ出身のムニシピオの議会議員が選出されなくなったことがあげられる。

サン・マテオの住民は、この二〇数年間の諸変化を根本的な変化として受けとっている。その一つとして交通手段の発達をあげる。サン・アントニの町までバスで一時間かかるとは言っても、かつてのように馬車を仕立てて四時間を要した時代に比較すれば格段の進歩である。国道は舗装され（地域内部の道路は未舗装）、観光シーズンにはバスが二往復し、観光客もエクスカーションでやってくる。調査期間中、この地域にとって歴史的な事件に遭遇した。教会の付近のみであるが電気敷設工事が行われていたことである。水道、電話の敷設の計画は未

だない。イビサ市、サン・アントニの町との生活諸条件の格差は大きい。外国人観光客のために、あらゆる近代的施設が整備されていく観光地域と対比するとき、このアンバランスな発達はさらに明瞭となる。

イビサ島が観光地として商品化されるとき、管理化された都市社会からの脱出が大きな意味をもっている観光客に対して、静かな農村、エキゾチックな農村の風俗もまた商品化される。サン・マテオの農村も例外でなくこのような過程に組み込まれる。問題は、観光地としての発展とは、サン・マテオにも明らかのように、一方で農村を破壊する過程の進行と裏腹であり、その分だけ観光地としての商品価値を減耗している点にある。

むすびにかえて

本稿は、以上のように、イビサ島のサン・マテオ教区における実態調査の結果を、生活空間、農業生産形態、人口構造を中心にまとめ、伝統的な農村における後進性と最近の観光業の発達の影響によってもたらされた諸変化の実態を明らかにし、また観光開発による経済的發展が意味する本質の一面にふれたものである。

観光地化の進行は、観光地としての価値をもっている空間の序列にしたがって、空間の再編成を惹き起す。また、観光地としての価値をもつ空間を生産するという点で、開発計画の策定と密接に関連をもっている。サン・アントニでは、一九七七年に、ムニシピオ全域の土地利用計画の方針を出した「都市整備の一般計画 Plan General de Ordenación Urbana」を策定した。⁽²⁹⁾ 同計画の策定目的は、ひとつにはアナーキーに進行する観光開発の規制にあるが、主要目的は新たな観光地域の整備計画である。同計画では、サン・マテオの土地利用は、粗放的農業地域と山地として線引きされ、アウバルカはとくに景観保存地域と指定されている。しかし、各地域の「都市整備の一般計画」を規定している一九五六年制定の土地法 Ley del Suelo は、何らかの法的規制措置を含んでいるわけではない。さらに、部分計画 Plan Parcial による開発の可能性を認めるという二段構えになっており、この点から言えば、サン・マテオにおいても大規模な開発の可能性の余地は残っていることになる。地域開発計画と観光開発という問題を考える際に重要なのは、開発計画を策定する主体がどこにあるかということであろう。

調査期間中、イビサ島を揺がした出来ごとのひとつは、観光開発と自然保護をめぐっての大規模な住民運動の組織である。イビサ島のシンボルである塩田地帯の観光開発を試みようとしたサン・ジョセフのムニシピオの「一般計画」に対する自然保護の立場からの反対運動であった。観光開発に対するイビサ島で初めての問題提起である。現在、ムニシピオの議会議員の直接選挙が準備されつつあるといわれる。ムニシピオレベルでの政治的意志決定への参加が認められることになれば、開発計画の策定への直接のかかわりとともに観光開発のあり方もまた問題にされてくるであろう。このような変化は、一九七二年以降のスペインの流動的な社会変化のあらわれでもある⁽³⁰⁾。

(1) イビサ島の観光業の発達を観光客数を指標としてみると、一九六〇年を一〇〇(三〇、一一九人)とすると一九七五年には一七四三(五二五、〇四五人)となる。とくに一九六七年以降は、チャーター機による観光客数の増加が顕著で、イビサ島の観光業の急速な発達をもたらしている。

(2) Rosa Vallés Costa: Contribución al Estudio del Turismo en Ibiza y Formentera, *Boletín de la Cámara Oficial de Comercio, Industria y Navegación* (C. O. C.

I. N.) de Palma de Mallorca, No. 676—677, 1972, pp. 107—168. B. Barceló Pons: Población y Turismo en el Municipio de Sant Antoni Abat, *Boletín de la C. O. C. I. N. de Palma de Mallorca*, No. 683, 1974, pp. 63—102. Jotazor: El Turismo en Ibiza y Formentera, *Boletín de la C. O. C. I. N. de Palma de Mallorca*, No. 630, 1961, pp. 48—54.

(3) Jorge Demerson: Las Iglesias de Ibiza, *Amigos de Ibiza*, Ibiza, 1974, p. 79.

(4) 従来、イビサ市は Pla de Vila de Santar・エウマリンは Santa Eularia o del Rei de Sant Joan・Balansat de Sant Antoni de Portmany de Sant Joan de Ses Salines の quartó に相当するとされてきたが、マリ・カルドナの詳細な研究によってそのような単純な関係になんが証明された。Joan Mari Cardona: I. La Conquista Catalana de 1235, *Instituto d'Estudis Eivissencs, Eivissa*, 1976, pp. 311—317.

(5) ヴァンダという言葉は、本来、quartó が封土としてさらに分割された時、封建領主に支払われるべき貢租を意味していたが、イビサ島では、それとは異なった特殊な内容をもって歴史的に継続した。当初は、農村において、教区よりも狭い空間を識別するために、各々に固有名詞を付加して使用されていたが、人口増加あるいは居住空間の分的拡大の結果、宗教・行政上の管理・統治の空間単位と

なつた。したがってそれとよびにマンタの数を増加して

らる。固有言語には、サン・トニオに於けるマンタをヤ
リトニヤのヤのなトニオト語起源のものがあつた。Juan
Castelló Guasch: Toponimia de Ibiza y Formentera,
Boletín de la C. O. C. I. N. de Palma de Mallorca,
No. 639, 1963, pp. 81—82.

(9) El Jefe Politico de la Provincia (D. Joaquín Ma-
ximiliano Gibert: Relación de la vista practicada en
las islas de Ibiza y Formentera, al tenor de la Real
Orden de 25 de 1845. Isidoro Macabich: Historia de
Ibiza, Vol. II, Editorial Daedalus, Palma de Mallorca,
1966, pp. 250—270 以下參。

(10) Juan Vilá Valenti: Ciudad y Campo en la Isla de
Ibiza, *Boletín de la C. O. C. I. N. de Palma de Ma-
llorca*, No. 639, 1963, (*MEDITERRANEE*, No. 4,
1962)

(11) Rosa Vallés Costa: El Poblamiento en las Islas
de Ibiza y Formenters, *Saitabi*, XXIII, 1973, pp. 68
—72. 人口分布の概略は、各トニオの總人口とそれ
の中心部及び居住トニオの割合。

(12) 6) Isidoro Macabich, *ibid.*, p. 10.

(13) Arxiu Historic de la Pabordia. Relación anual que
los parrocos debian mandar al Obispado. Parroquia de
San Mateo, año 1786, 1796, 1806, 1816, 1826, 1836,

1846, 1856, 1866, 1876.

(14) J. Vila Valenti: Los llanos de San Mateo y San-
ta Inés, *IBIZA* (Revista del Instituto de Estudios
Ibiccencos) Num. 6, 1960, pp. 9—10.

(15) 9) *ibid.* p. 10.

(16) 4) *ibid.* pp. 83—84.

(17) サン・トニオとドムベラ、シラの被るべきトニオを
トニオの被るべきトニオ。Antonio Costa Ramón: Apuntes
sobre los Apellidos en las Islas Pitiusas, *Boletín de la
C. O. C. I. N. de Palma de Mallorca*, No. 644—645,
1964, p. 179.

(18) トニオに於ける農地の土地台帳は一九〇六年に制定
されたが、所有關係を明確にするところでは成功してい
なかつた。したがって世帯別、分給小作農が専らトニオの
な地域では利用に限界がある。さらに土地台帳の各地区別
のトニオはトニオをこえて所有する場合の所有規模の把
握が困難なところ、トニオ南部のより大きな土地所有者
の専らトニオにトニオ同様制限がある。Antonio López
Ontiveros: Notas sobre el Catastro Actual como Fu-
ente Geografica, *Estudios Geograficos*, Vol. XXXII, No.
122, 1971, pp. 119—143.

(19) Instituto Nacional de Estadística: Censo Agrario
de España, 1972, Serie A-Primeros Resultados, Bal-
ares

- (71) Jean Bisson: La Propiedad Ciudadana en las Islas Baleares, *Boletín de la C. O. C. I. N. de Palma de Mallorca*, No. 674, 1972, pp. 3—16.
- (81) 半世紀 Prosopis juliflora 侵入の歴史とその影響。家畜飼料としての利用とその害。種子の散布とその害。農業文化の侵入。Juan M^a. Serres Ubach: La Agricultura en Ibiza, *Boletín de la C. O. C. I. N. de la Palma de Mallorca*, No. 631, 1961, pp. 144—145.
- (91) B. Barceló Pons: Reseña Geográfica de las Islas Baleares, Memoria Camara Oficial de Comercio, Industria y Navegación de Palma de Mallorca, año 1965, p. 13.
- (82) Jean Bisson: La Utilización del Suelo en las Baleares; Contribución al Estudio de la Geografía Agraria de las Islas, *Boletín de la C. O. C. I. N. de Palma de Mallorca*, No. 643, 1964, pp. 63—65.
- (81) Enrique Fajarnés: Ibiza, en los siglos XIX y XX, *Boletín de la C. O. C. I. N. de Palma de Mallorca*, No. 630, 1961, p. 21.
- (82) Casimiro Urech Cifre: Estudios sobre la Riqueza Territorial de las Islas Baleares, Palma de Mallorca, Guasp, 1869, pp. 544—545.
- (83) Luis Salvador, Archiducque: Die Balearen in Wort und Bild Geschildert, Leipzig, 1869—1891, 9 Bänden. Ersten Band, Die Alten Pitansen, Leipzig, 1869, p. 202.
- (84) Municipio de Sant Antoni Abat: Padrón de habitantes, año 1950, 1960, 1975.
- (85) Jordi Nadal: La Población Española (Siglos XVI a XX), Editorial Ariel, 1966, Barcelona, pp. 96—105.
- (86) スペインでは、一九七二年三月二日法で、外国人による農地の取得は、灌漑地四割、非灌漑地二〇割まで内務省の許可なしに認められなくなった。
- (87) スペインでは、一九六〇年代後半から急速に増加したヨーロッパ各国からの青年が集まっていく。イビサ島では、アメリカ合衆国で初期にみられた文明社会の歴史と異なる本来的なものとは異なり、最近では家族からの何らかの資金によって生活しているものもある。観光客目あつきの露店商売が多りに精を出すものがほとんどで、擬似ファミリー pseudohippie の皮肉な存在である。
- (88) Horacio Capel: Capitalismo y Morfología Urbana en España, Los Libros De La Frontera, Barcelona, 1975, pp. 118—119.
- (89) Plan General de Ordenación Urbana, San Antonio, 1977.
- (90) その一例としてイビサ島をも含むカタルーニャ地方でカタルーニャ語の復権があげられる。イビサ島ではカタ

ルーニャ語系のイビサ語が日常的に使用されているが、サン・マテオでは、カステイリヤ語は一種の外国語のように意識されている。とくに、サン・マテオでは高齢の女性には、文盲率が高く、しかもカステイリヤ語を全く話さない場合が多い。フランコ体制下で、教育も教会におけるミサもカステイリヤ語に統制化されたことに対して、現在のカタルーニャ地方におけるひとつの地域主義の主張の高揚のひとつの現われとしてカタルーニャ語の復権も考えられよう。尚、本論の地名標記はカタルーニャ語に統一した。

サン・マテオの調査は、竹内啓一氏との共同調査であるが、本稿の文責は筆者にある。調査に際し、惜しめない協力をして下さったアントニオ・コスタ神父、イビサ島の農業について御教示下さったジョアン・カルベラ農業技師、

また住民台帳の閲覧等に便宜を図って下さったサン・アントニの役場の皆様の御協力に心から感謝いたします。またイビサ島調査に關していろいろ有益な御指導を下さったバルセロナ大学のピラ・パレンティ教授、バルセロ・ボンス教授、イビサ中等学校教員のゲラウ・デ・アレジャノ氏に、本稿にかえて御礼申し上げます。

(一橋大学助手)

*本稿は昭和五十二年度科学研究費補助金(海外学術調査—現地調査)「地中海の島嶼における文化交渉の影響」および昭和五十三年度科学研究費補助金(海外学術調査—調査総括)「地中海島嶼における都市・農村生活の構造の分析と島嶼及び外部社会の交渉の機構の研究」による研究成果の一部である。